

第16回日本ジオパーク委員会議事録

日時： 2013年1月28日（月）13:00～17:15

場所： 経済産業省 別館11階 1111号会議室

出席者

委員長

尾池和夫 財団法人 国際高等研究所 所長

副委員長

町田 洋 日本第四紀学会（東京都立大学 名誉教授）

委員（五十音順）

阿部宗広 一般財団法人 自然公園財団 専務理事

伊藤和明 NPO 法人 防災情報機構 会長

菊地俊夫 日本地理学会（首都大学東京 教授）

小泉武栄 東京学芸大学 教授

高木秀雄 日本地質学会（早稲田大学 教授）

中川和之 日本地震学会（時事通信社 山形支局長）

中田節也 日本火山学会（東京大学地震研究所 教授）

成田 賢 全国地質調査業協会連合会 会長

オブザーバー

外務省大臣官房国際文化協力室

石原裕章

外務省大臣官房国際文化協力室

門倉俊明

文部科学省国際統括官付 ユネスコ協力官

堀尾多香

文化庁文化財部記念物課 主任文化財調査官

桂 雄三

文化庁文化財部記念物課企画調整係

荒川瑞穂

林野庁森林整備部計画課 森林計画官

濱名功太郎

林野庁国有林野部経営企画課

柏 智久

経済産業省産業技術環境局知的基盤課 課長補佐

高橋 潔

国土交通省砂防部砂防計画課地震・火山砂防室

吉松雅行

観光庁観光地域振興部観光資源課観光地域づくり相談窓口 相談員

田嶋ひとみ

気象庁地震火山部火山課 調査官

上野忠良

環境省自然環境局国立公園課 課長補佐

高橋啓介

環境省自然環境局国立公園課事業係 係長

速水香奈

事務局

利光誠一 産業技術総合研究所地質標本館 館長
下川浩一 産業技術総合研究所地質標本館 副館長
渡辺真人 産業技術総合研究所地質標本館
今西和俊 産業技術総合研究所地質標本館
住田達哉 産業技術総合研究所地質標本館
吉田清香 産業技術総合研究所地質標本館
関口 晃 産業技術総合研究所地質標本館
菅家亜希子 産業技術総合研究所地質標本館
中川明日香 産業技術総合研究所地質標本館

日本ジオパークネットワーク

事務局長 斎藤清一

配布資料

資料 1 第 15 回日本ジオパーク委員会議事録案
資料 2 ジオパーク活動の状況（渡辺）
資料 3 a, b 洞爺湖有珠山ジオパーク現地調査報告
資料 4 a, b 糸魚川ジオパーク現地調査報告
資料 5 a, b 島原半島ジオパーク現地調査報告
資料 6 a, b アポイ岳ジオパーク現地調査報告
資料 7 a, b 南アルプス（中央構造線エリア）ジオパーク現地調査報告
資料 8 2013 年度新規申請・再認定の現地審査について（渡辺）
資料 9 現行の採点表
資料 10 現行の現地審査チェックリスト
資料 11 現行の申請書作成手引き
資料 12 現行の再認定審査方針
資料 13 現行の再認定審査概要（再認定を受ける地域向け）
臨時資料 1 様似町アポイ岳ジオパーク推進協議会からのコメント
「住民に対するジオパークの普及のあり方について」
臨時資料 2 隠岐ジオパークの GGN 申請に対する UNESCO からのレター

13:00 開会

利光事務局長より開会宣言.

【委員長挨拶】 13:01～

尾池委員長より、ジオパークについて、問題はいろいろあるもののいろいろな事が前向きに進み、本日の再審査を迎えている、とのあいさつがあった.

【資料確認】 13:03～ (事務局・渡辺)

【第 15 回委員会議事録の確認】 (資料 1) 13:04～

委員長より確認作業について説明.

- ・意見があれば、本委員会中で発言するように.
- ・本委員会の最後で承認を確認する.

【ジオパーク活動の状況について報告】 (資料 2) 13:05～

事務局・渡辺より以下の説明.

- ・JGN 室戸大会について、非常に盛況で、活発な議論が行われた.
- ・各ジオパークの関係者が集まるシンポジウム等が、地域や学会で開かれ、ジオパーク間の交流が活発化している.
- ・ジオパークのユネスコイニシアチブ化について GGN とユネスコ生態地球科学部で準備中であり、GGN の活動資金として、加盟地域に対して 1000 ユーロの会費徴収の打診があって、日本の 5 地域全てが可能であるとの返答した.

【再認定現地審査 (GGN の 3 地域) 報告】 13:09～

1) 洞爺湖有珠山ジオパーク (資料 3 a, b)

現地審査報告 (渡辺)

- ・事務局が壮瞥町から洞爺湖町へ移動することによる運営体制への不安：町長との会談で一所懸命動いていることが判る.
- ・事務局担当が数年で配置換えとの問題指摘：役所のローテーションで仕方ない面があるが、しっかりと対応するとの返答をもらった.
- ・事務局中に火山の専門知識を有する担当が必要との指摘：財政的に難しいとの返答.
- ・善光寺・福田さんの私設資料館・北小金貝塚のガイドツアー：それぞれガイドツアーとして面白いが、ジオパーク全体のなかでのつながりがあまり意識されていない.
- ・福田さんの資料館は大変面白く、地元の大人・子供が集まる場所として開放している他、庭を掘って自作した 1640 年駒ヶ岳山体崩壊の津波堆積物の剥取り標本や工夫を凝らした有珠山の発達模型を展示.

・ガイド団体の質：様々なガイドがありそれぞれ成功しているが、全体としてガイドのレベルをどうそろえて、どう引き上げるかが課題。火山マイスターは、良い制度であるが、ガイドだけを養成しているわけではない。

・観光活用：3.11の震災以降、防災教育の1つとして修学旅行での利用が増加。

・そうべつ情報館：最近作った説明板は非常に良い。従来の解説板は一部作り直しが必要である。現行のパンフレットはまだ一般向けではない。

・GGNからの指摘事項への対応：他のジオパークとの交流が見えない。

中田による補足。

・住民レベルまで活動が浸透していない。

・将来構想、事務局に専門家不在および中心人物の後継者育成に不安。

・国際貢献について意識がされていない。

竹之内氏からの伝言（渡辺）。

・事務局はジオパークをきっかけに役所の仕組みを変えることを考えても良いのでは。特定の関係者だけでなく、若手ももっと自由に動ける体制を。

質疑応答

・GGNの指摘事項への回答→解説板については、新しいものは改善されている。地元や観光産業との連携については、宿泊施設で地元食材を活かした料理やピザがある。

・自治体ごとの対応の温度差→洞爺湖町は熱心。伊達市はまだこれから。

・解説板の改善→科学的正確さを優先させ詳しすぎる傾向にあるため、非専門家の関与が必要。解説板の勉強会が開かれる予定。担当者間の意思疎通の問題もある。

・GGN加入にも関わらず、ホテルの廃業が多い事→観光協会は、ジオパークを利用して集客して、実績を上げつつある。観光客減少は、不況による全国的な傾向。

・観光客を対象とした防災対策→火山マイスター制度等、ジオパークが防災に特化し意識は高い。しかし、2000年噴火後のハザードマップが旅館に貼られていない場合も。

・ガイド養成の質の担保→火山マイスターはガイドとは別の仕組み。様々なガイド団体が共同の勉強会をはじめているが、質の担保には至っていない。GGNの審査までに計画を立てるようアドバイス。

・ジオパークとしての国際貢献は？→GGNは、ネットワークであるため互いに情報交換してレベルアップする必要がある。GGN加盟ジオパーク同士の交流により互いの活動の質を高めることが高評価につながる。

・活動資金は、行政に頼っているのか？→自治体からの拠出が基本であるが、パンフレット等は、観光協会の予算も使われるようになってきた。

2) 糸魚川ジオパーク（資料4 a, b）

現地審査報告（中田委員）

- ・GGNの指摘事項への対応：ヒスイ販売業者・石灰岩採掘業者を運営組織やジオパークエリアからはずす。フォッサマグナミュージアムについては、よりダイナミックなものへの展示改修はリニューアルで対応予定。説明板については改善が進んでいる。
- ・フォッサマグナミュージアム：GGN加入で入館者増加。教育委員会の理科教育センターが移転し、総合教育が活発化。
- ・道の駅親不知ピアパーク：ミャンマー産のヒスイ販売がある。翡翠ふるさと館では、ヒスイの大きな転石を展示し、解説も分かりやすい。観光インフォメーションセンターは、民間運営のためかジオパークとの関連が少なく、GGNの審査時に見せられない。
- ・ヒスイ王国館：ミャンマー産のヒスイ販売がある。ジオパークガイドが常駐し、飛び込みでの案内にも対応。
- ・ジオツアー：全体的に良い。ジオパーク検定合格・講座4回受講・現地テストを経て認定。有効期限は3年。複数あったガイド会を統合し、ガイド同士の情報交換向上。マイコミ平では、地権者とガイド会による新しいタイプのジオツアー。
- ・ヒスイ販売：生活保障等で難しい問題あり。産地に寄らず在庫豊富。国内法を遵守の上で、伝統と生活を守るため必要とGGNを説得の方向。国外産は、目立たぬよう要請。
- ・教育活動：教育委員会によるジオパーク学習により、糸魚川市内での認知度90%超。
- ・体制：スタッフが4～5名→14名へ充実。
- ・国際貢献：香港ジオパークと姉妹提携し、展示品の交換、中学生の交流など活発。

質疑応答

- ・ヒスイの問題→GGNの指摘どおりに業者は運営組織からはずしているが、旗を立てての販売あり。最低限の販売にとどめ、ミャンマー産は目立たないよう注意。GGNへの対応は慎重に。ジオパークとしてアピールすべき地質学的な意味をヒスイ問題が損なうことがないように。ヒスイを良いデザインに加工して後世に残すのも保全の1つ。地域振興や伝統産業を守る事と保全のあり方について、地元は議論を進め、JGCは見守る必要がある。
- ・地質学的な意味→北米プレートとユーラシアプレートの収束境界であることをもっとアピールすべき。発散境界のアイスランドは世界でも人気。活断層でも議論のある「40万年前」について、北海道から糸魚川に衝突境界が移動する説などホットな話題もある。
- ・新幹線駅→開通にかなり尽力。各種施設にホームからアクセスしやすい構造を予定。
- ・有料ガイドの生計→需要が少なく、ガイドだけでは生活できない。
- ・ヒスイの観光活用→観光客は観光土産の認識あり。ヒスイ拾いも人気が高い。保全意識が高まり、目玉をジオパークに持っていくために目標を定める必要を認識
- ・マイコミ平ツアー→以前より業者が協力的で、場所も広がりつつある。環境破壊が進まないよう木道の整備予定で、必ずガイドがついて歩く。ツアーは有料。

3) 島原半島ジオパーク (資料5 a, b)

現地審査報告（渡辺）

- ・ GGNの指摘事項：説明板が難しい．個々のサイト・施設同士の連携が悪い．ガイドの仕組みの確立．きちんとした中長期計画に基づく運営．
- ・ ガイドの問題：流暢であるが一方向的な語りになりがちで，双方向のコミュニケーションが不十分．
- ・ 市長の交替：島原市・雲仙市で市長交代．島原市長はジオパークに熱心で，3市の連携不足を認識，今後3市長が集まってジオパークについて協議する予定．
- ・ 教育：事務局の教育・普及の専門家二人が，防災・科学・環境教育など熱心に活動．後継者問題あり．二人がいないと教育活動や一定レベル以上のジオツアーが成り立たない．
- ・ 新しい遊歩道：ジオパークの枠組みで各種機関が協力して現地調査した上でルートを選定し，観光の新たなうりとなった．
- ・ ガイド：ジオガイド講習会が3年行われているが，活躍の場がうまく作り出せていない．若手のガイドを育てるには，生計が立つ料金を設定したガイドツアーが必要．ジオパークとしてガイドの質を担保する仕組みが必要．
- ・ 観光：修学旅行では，長崎での平和教育後，島原で防災・火山・自然体験教育のパターンができつつある．島原鉄道が社員研修でジオパークを使い，各種のツアーを立ち上げる等，島原ジオパーク内の公共交通を担うと自負．官民の協力がうまくいき始めている．
- ・ ジオパーク運営団体と市民との関係：コミュニケーションを深めて解決すべき問題がある．

質疑応答

- ・ 事務局と観光協会や3市等との連携→観光協会と事務局が災害記念館の中で同じ部屋になり，連携が改善した．災害記念館と事務局の関係は，記念館のジオミュージアムへのリニューアルを機に，さらに改善されると期待．
- ・ ジオミュージアムの青写真をGGNに示せるか→タイミング的に間に合わない．方向性やどんなものを盛り込むかは，示せると期待．
- ・ 普賢岳と竜馬の写真→景観上良くない．GGNの再審査時に問題になる可能性．
- ・ 事務局体制の持続性→場所は固定しているが，定期的な人事移動があり良くない．市長に対しても意見をしたが，回答はなかった．特に事務局長後継者が問題．
- ・ 5月の国際会議を経て3市の温度差の改善は？→南島原市長が積極的になった．
- ・ H20年にGGNから指摘された説明板の改善が遅れている→事務局の専門家二人が活発に活動すればするほど，説明板の改善の時間が無くなる．後継者問題と直結．地元ガイドが，説明板やガイドブックなどに対応できるよう成長する仕組みになっていない．
- ・ 島原半島ジオパークは，何を伝えようとしている？→ジオパーク全体として方針を明確にし，そこからジオパークの運営方針を決めていく必要．

- ・後継者問題→熱心な人が固定されて若者が育たない。雲仙温泉に観光協会雇用のプロガイドを目指す若者がいる。地元高校生もジオパークの活動をやっている。そういった人達がジオパークのコア的な存在になるようサポートする必要性。事務局内の人事異動が、経験の蓄積を阻害している面がある。
- ・地元の番組作成→事務局の教育の専門家が毎週ジオサイトを案内。ネットでは見られない。

【GGNの3地域に関する総合討論】14:30～

- ・再認定の考え方は？→3地域については、日本ジオパークを取り消すという意見はないので、再認定を前提に、GGNの審査に向けてのアドバイスを議論する。
- ・高山植物の保護の経験によると、自然教育を通じて、本当の価値を教えることで、保護が自ずと進む。教育が無いと珍しい・売れるかどうかは地元の人々の行動を決める。ジオパークでの自然教育は、そのまま国際貢献にもなりうる。
- ・糸魚川のヒスイ販売は、ジオパークと切り離したことで解決ではなく、価値観の共有を進めるためのフォローが必要。イタリア・トスカーナの石灰岩については歴史的な観点から、それを使った彫像はGGNに問題視されていない。日本の場合も文化としての位置づけ重要。同様の問題は、黒曜石からエネルギー資源まで様々なレベルである。
- ・グローバルなストーリー→石灰岩の大露頭は、過去の二酸化炭素吸収と関係あるなど、気候変動とも関係あるストーリーがあり、教育上も重要。
- ・JGCが事務局の担当の交替などのルール作りや海外の事例紹介すべき→それぞれのジオパークの特性と担当者を見つつフレキシブルに対応する事が重要。ルール策定が良い方向になるとは限らない。良く分かった人が来た時、長く居てもらおうようにする。
- ・JGCは、指摘事項をレポートとして出し、回答を義務付けて、GGN審査に備える。
- ・説明板と担当の学者の個性→本物の学者がジオパークにかかわっている事は心強い。個性を薄めず万人に分かるような工夫必要。理解度に応じて段階的な説明も1つの案。
- ・専門員として、学者でなくても、博士号取得者がジオパーク関係で常勤として雇われる方向が望ましいのでは？→色々な階層やレベルの人がかかわっている事が大切で、標準化は難しい。各ジオパークで足りない部分をJGCが実例の比較で指摘する事が大切。そういう視点で審査員向けのガイドブックやデータベースを事務局にお願いしたい。
- ・各ジオパークの比較について→2月のJGNの説明板研究会での切磋琢磨に期待。JGN内に全てのジオパークの説明板を見比べられるような部屋が欲しい。
- ・4年前の指摘事項を踏まえつつ、今回の議論で指摘事項をまとめて各地域に通達する。続きの議論は、メールで行う。

15:05 まで休憩

【再認定現地審査（JGNの2地域）報告】15:06～

1) アポイ岳ジオパーク

中川による報告

- ・事務局に2008年のJGCの指摘事項への対応を聞くことがメインだった。
- ・説明板：もともと説明板がなかったが、かなり整備されていた。内容は専門用語を多用し分かり難い。
- ・ビジターセンター：アポイ岳登山客向けのビジターセンターをリニューアル中。ジオパークの拠点とする予定。
- ・ガイドブック・パンフレット：分かり易いものと非常に難しいものがある。
- ・ファンクラブとの連携：もともとは高山植物の保全活動をしていたが、現在はジオパークにも関心が高い。しかし、ガイドブック等が難しいと敬遠される傾向。
- ・カンラン岩以外のジオサイト：新しいジオサイトを設定するも、岩石名と構造を専門用語で説明。カンラン岩の露出の重要性を理解したうえで、その上にあったプレート本体の衝突構造とダイナミクスの説明を望んだが、伝わっておらず、指摘の仕方を反省。
- ・事務局体制・運営・状況：小さな町一つで良くやっている。専門の学芸員を1人雇い、拠点を作り、町の長期計画にジオパークが位置づけられ、町長や市民の意識が高い等評価できる。ガイドや市民がジオを面白く語るレベルには達していない。
- ・地域振興：オリジナルのグッズ・お土産が増加。色々な事にジオパークを関連付ける傾向。
- ・歴史との関連：アポイ岳とアイヌや港の歴史は関連深い。ジオパークとの連携は不十分。
- ・追加の臨時資料1は、地元の決意表明。ジオを易しく伝える事について問題を認識。より学術的価値を強調すべきとの誤解があり、説明が専門的になり過ぎた。

質疑応答

- ・ジオパーク認定後の体制整備→地球科学専門員を1名雇った。観光課の課長も熱心。拠点が廃校跡にできた。子供向けにカンラン岩を削る実験などもある。
- ・カンラン岩の文鎮→文鎮販売はない。店のあちこちにカンラン岩が置いてある。地質学的な意味までには言及がなく、今後の対応次第で面白くなりそう。
- ・他の自治体との関係→道庁・様似町・えりも町共同で観光振興。ジオパークの範囲は単独で。
- ・一つの自治体でよくやっていて、他のジオパークも見習うべき点多数。えりも地殻変動観測所のプレートの動きのデータは、説明に使えるが、ジオパークに含めるほどではない。
- ・再審査への時期的な影響→再審査時に雪で山へ入れなかったが、積雪がちょうどカンラン岩の位置を示していた。山以外にアイヌの歴史や文化など町にも観光資源がある。町でもガイドツアー等が始まり、ジオパークの認識と活用が進み始めている。

- ・熊と津波対策→ファンクラブは、熊に限らず様々な危険に対して山での安全を確保。津波については、ハザードマップを作って、地域で学習。
- ・町外からのジオパーク訪問者について→様子町に観光に来る10万人のほとんどが通過のみ。道の駅でジオパークの宣伝はあるが、商品開発はまだ。
- ・観光商品開発→3本柱（ジオと高山植物と歴史・文化）の連携は、進んでいない。日本海を通じる北前船（昆布ロード）など海も意識すべき。札幌から出発の火山→カンラン岩のジオツアーも面白そう。

2) 南アルプスジオパーク

菊地による報告

- ・主な課題：現地組織・ガイドの養成とガイド内容・ジオサイトの保全
- ・組織：伊那市、大鹿村、飯田市、富士見町と参加市町村が多く、連携が悪い。南アルプスジオパーク協議会という独立した運営母体ができ、連携改善に取り組み始めた。飯田市は、専門職員を置く方向。
- ・ガイド養成：それぞれの市町村での養成と活動だったが、共通する部分については、養成プログラムと認定制度がある。5年間ガイド実績ない場合、資格剥奪で質を担保。
- ・ジオサイト保全：化石掘りがジオパークの売りの一つ。ジオパークのツアーに参加した人のみ発掘。採取した化石は必ず化石館で展示（日付と採取者名も）。保全すべき化石がある場所は使わず、発掘場所はアンモナイトの無いところ。
- ・解説板：非常に少ない。駅で降りても、案内等一切なく「ジオパーク難民」になり易い。スマートフォンを使ったガイドシステム「ジオパークぶらり」開発中。
- ・教育：しっかり行っている。小・中学生は化石採取、高校生はMTLの学習と他ジオパークや都会の高校との交流活動が盛ん。
- ・普及活動：登山マップ・サイクリングマップにジオパークの宣伝と解説を盛り込む。バスの運転手がジオパークの講習を受け、バス中での分かり易いガイド案内で好評。アンモナイトの無いパン「アンモナイト」が好評。
- ・課題：道の駅等での情報発信の強化。展示の改善。市を超えた運営体制の強化。一般市民へジオパーク活動を広げる。ガイド養成のカリキュラムのレポート提出を求めている。

質疑応答

- ・ゼロ磁場水はその後どうなったか？→ジオパークとは全く関係ない。認定時審査の指摘事項であって、ジオパークパンフレットと水の宣伝は切り離されている。ジオパークとしては磁場の科学的測定と解説が必要。
- ・他ジオパークとの連携→青少年の家を含むジオパークと毎夏に交流会開催。内容はまだ浅い。MTLを意識した連携重要。

- ・ジオ登山・トレッキング→作成した地図が毎年消費される。地形図を使用した正確さが好評か。
- ・人はなぜ山岳地域に住むのか？をもっと語っては？→MTLの内帯と外帯で傾斜が異なり、緩斜面を利用。
- ・ホームページなどには問い合わせ先が多すぎる→最近では協議会のある伊那市（旧高遠）が中心。伊那市の創造館も拠点の一つで、ジオパーク関連の文献やMTLの学術的情報が揃っている。
- ・MTLだけでなく、付加体や多くの地質時代が纏めて見られる特徴を宣伝すべき。
- ・体制と専門員→専門員はいないが4月から置く予定。各自治体の出向者が3・4名。
- ・付近の博物館との連携→中央構造線博物館と化石館は、ボランティア的に学術顧問として連携。
- ・ジオパークのストーリー→伊那谷の災害や巨大崩壊地。付加体による石灰岩地帯と特徴的な植物群。伊那山地と南アルプスがかなり性格の違う山であること。九州から関東に至るMTLの全体像を説明するジオパークに。ガイド等もジオサイトの個別の内容に加え総合的・全体的な解説を。
- ・4年間で何をやってきたか→教育によりジオパークが根づいてきた。次の4年では、教育から地域全体の活動に発展させることが課題。そのための体制はできている。
- ・説明板→問題がある。経験を積んで、新しいものは分かり易くよく出来ている。4市町村で統一して作ろうとする動き。
- ・案内の不足→協議会は問題を理解している。スマートフォンシステムは使える。
- ・中心的な人物がいるのか→伊那市に育ってきた。

【JGNの2地域に関する総合討論と再認定の可否】 15:59～

- ・アポイ岳にはイエローカードの必要性はない？→改善の指摘とその報告必要。JGCも指摘の仕方に問題があった。学術的価値の啓蒙が、学術的な正確さと誤解され、分かり難い説明板つながった。
- ・南アルプスはイエローもありうるか？→イエローによってモチベーション下がるのでは。
- ・2年後にレポート再提出でも良いか？→それはイエローカードと言うことでは。協議会の体制がようやく整ったばかりで、博物館等の連携もこれからだが、教育や新しくできた説明板は高評価。
- ・イエローだとすると、改善事項を明確に→JGNや他ジオパークとの交流で問題についてサポートや学習があるべき。
- ・課題は認識されていて、具体的改善について取り組みもあり、レポート提出で良い。

・南アルプスジオパークの問題点：1. 担当者の顔が見えない。2. 他ジオパークとの連携を強化し、良いところを取り入れる努力必要→伊豆半島ジオパークや箱根ジオパークとの交流はすでに始まっている。

・再認定の基準として、PDCA がうまく廻っていることが重要。結果が不十分であっても、再認定をして廻すことに力を貸すべき。

・イエローによるモチベーション低下とは？→再認定を意識して、改善の取り組みは実際にあるが、それを無駄にしたくない。

・JGN 中での貢献については？→南アルプスについては、伊豆半島ジオパークや箱根ジオパークとの交流が始まっており、意識されている。問題は、地元自治体間のネットワーク→アポイについても、道内の他ジオパークとの連携模索があり、糸魚川ジオパークとも動きがあり、認識がある。

・イエローでも再認定書を交付。期限は2年間となる。

・南アルプスも今後ジオパークとして活動してもらうことは、間違いない。JGC としても GGN の方にフォローが優先された経緯があり、反省される→他ジオパークに比べ到達度が低く、来年以降の再審査にも影響→今後イエローは稀な事にすべきか？→審査の方法も考える必要性あり→認定後3年目ではじめて改善指摘をだし、その回答ももらった。PDCA が廻っているかが重要→JGC も基準を明確にしなかった点を反省すべき。

・人のネットワークその他が整備されたら、認定して支援し、多くのジオパークを育てていくことが JGC の基本方針としてある。JGC で厳しい議論があったことを南アルプスには、委員長書簡をつけて通常の再認定としたい。2年後に到達度のレポートをいただく（尾池委員長発言）→南アルプスが再認定の時の基準となることを避けたい→南アルプスは、再認定に向けた取り組みが遅かったことは事実だが、改善への取り組みも進み始めている。限りなくイエローに近かったということも見えるようにコメント発信（尾池委員長発言）→JGC としてもフォローが十分でなかったという反省もある→南アルプスにも協議会が発足し、ようやく助言できる体制ができた。今後の再認定審査を受けるジオパークに誤ったメッセージにならないよう、十分にコメントを尽くしつつ、すべての地域を再認定するというところで如何か？（尾池委員長発言）→異議なし。

【プレス発表資料作成】16:35～

事務局から示された文案をもとに、プレス発表資料を作成。

【来年度の審査について】（資料8）16:51～

事務局より以下の説明。

・地域数が多く、GGN は白山手取川が準備中でアポイ岳と霧島は、可能性あり。阿蘇が保留中、JGN は11地域が申請の可能性。最大14地域を新規審査。

・審査のやり方として、委員の審査員は1地域1名ずつで、委員一人が1～2地域を分担、さらに GGN 加盟ジオパークまたは JGN から審査員を選出。

議論

- ・人を確保するために日程を早く決めることが必要.
- ・25 地域のジオパークがあるので, JGN から 2 名をだしてもらい 3 人体制を維持したい. 審査そのものがジオパーク担当者の勉強にもなりジオパーク間の交流になる. 審査員補助は, JGN 事務局の他, JGC が GGN 担当者や JGN 担当者の内ジオパークを良く分かっている者から指名する. もう一人は同行の記録員.
- ・来年審査に加わってもらう人との勉強会を連合大会前に行いたい.
- ・ガイドラインや採点表の見直しも含め, 早めの日程調整を→事務局で人選し承諾をもらい, ガイドラインや採点表の資料も見ていただき, 議論する (事務局) →連合大会時に, 関係者が議論できる場を.
- ・委員は, 地質・地学的な知識ではなく, ジオパークに関する知識が重要→3 名の審査員も, それぞれの得意分野を見てマッチングが必要.
- ・各学会でも, 人材の発掘・推薦を情報共有してすすめる.
- ・日程については再審査もあわせて検討.
- ・連合大会での委員会は, 5 月 20 日 (月), 勉強会は, 19 日 (日) の晩. 連合大会のプレゼンは, 丸一日かかる.
- ・GGN 保留中の阿蘇については報告書を待つ.

【その他】 17:07～

- ・GGN の新規審査 11 地域, 再審査 26 地域, 審査員が不足しているため, 日本から審査員を送りだすチャンス→JGC として戦略的にすすめるべき.
- ・隠岐 GGN 申請について, 4 つの項目について記述不十分の指摘があり, 8 月 15 日までに回答の提出が必要. 無難な回答をすれば, 審査通過の見込み. (臨時資料 2)
- ・次回の委員会は, 5 月 20 日 (月). 前回議事録も承認.
- ・17:30 より記者発表.

17:12 閉会

以上